

## 考古学者 甲野勇

# 博物館をつくる

### はじめに

考古学者 甲野勇<sup>こうのいさむ</sup>は、戦後まもない昭和 21 (1946) 年から昭和 42 (1967) 年に亡くなるまでの、およそ 20 年間に国立に暮らし、多摩地域を研究フィールドとして活躍した考古学者です。

明治 34 (1901) 年に東京市日本橋区薬研堀に生まれた甲野は、大叔父の影響で幼い頃から槍や鍬などの古代の遺物に関心を抱き、大正 2 (1913) 年に明治中学に入学すると、自ら遺跡を発掘して回るようになりました。大正 11 (1922) 年に東京帝国大学理学部人類学科選科に進学すると、鳥居龍蔵、小金井良精、松村瞭らに師事し、卒業後は同大学の嘱託員や、陸軍軍人として著名な大山巖の次男である大山柏が開所した大山史前学研究所の所員として、主に関東近郊の貝塚の調査に従事しました。甲野と同じく東京帝国大学出身の山内清男、八幡一郎らとともに、縄文土器の器形や文様の変遷などによって年代区分を行う編年体系の基礎を作ったことで有名です。

くにたち郷土文化館では、甲野が生前に所有していた資料（以下「甲野勇資料」）を収蔵しています。甲野勇資料は、平成 5 (1993) 年にご遺族から国立市へと預けられ、当館へ移管された後、平成 9 (1997) 年に正式に寄贈されました。平成 11 (1999) 年 4 月には国立市の登録有形文化財となっています。およそ 8,500 件に及ぶこれらの資料は、国立市の調査員や当館学芸員によって、整理作業及び調査研究が行われ、平成 14 (2002) 年に甲野勇資料の一部を目録化した『甲野資料目録 I A.書籍・文献』が刊行されました。しかし、その後は予算と人手不足等の事情により作業が滞り、現在もお整理作業が行われている状況です。

本稿では、目下整理中の甲野勇資料のうち、甲野が国立に越してきた頃から、その生涯をかけて取り組んだ博物館活動に関する資料を紹介したいと思います。



国立の自宅の庭でくつろぐ甲野 [写真]  
昭和 30 年代

## 1. 武蔵野博物館

甲野は、後藤守一<sup>1</sup>が発掘調査をした西多摩郡多西村草花（現 東京都あきる野市草花）の縄文遺跡で、地元のアマチュア考古学者 塩野半十郎と出会います。塩野は 10 代の頃に耕していた台地から見つけた土器片に心惹かれ、独自に遺物の採集を開始。多くの出土遺物を所有していました（以下「塩野コレクション」<sup>2</sup>）。この塩野コレクションを安全に保管し展示するための博物館を設けるべく、塩野、後藤、甲野の 3 人で建設予定地を探し回った末、井之頭自然文化園内の敷地を借り、公園内にあった講堂を改修して博物館とすることになりました。

設立準備段階では収蔵資料を公共の利用に供するため都営とすることが望まれていたようですが、運営費の予算計上が困難となり、都営が実現するまでの運営母体として武蔵野文化協会が設立されました。協会役員には、山田文雄（会長・副都知事）、後藤守一（理事長）、甲野（常務理事）らの名前がありました。

塩野コレクションを基礎とした博物館は武蔵野博物館と名付けられ、昭和 23（1948）年 10 月に開館しました。甲野の東京帝国大学の後輩で、武蔵野博物館協会の幹事でもあった和島誠一は、展示品の陳列方法について「細別された各型式の特徴が土器片で示され、それと関連して石器・骨角器などの生産用具や土偶などが系統的に陳列され、自ら発展の過程が辿れるように工夫された。またそれぞれの段階の貝塚の分布が、関東地方の大模型の上で、子供でもボタンを押せば色電球の点滅によって一目でわかる」、「〔石器や骨角器にも〕柄をつけて生産用具としての実態を如実に示」していると述べており<sup>3</sup>、考古学を学んだことのない一般の人々や子供でも理解しやすいよう、考古遺物と実際の人間生活とを結びつけ、視覚的に展示されていたことがうかがえます。また、博物館の東側には当時としては珍しい野外展示施設として「祖先の村」が設けられ、復元した縄文時代の竪穴住居や弥生時代の高倉、敷石住居などが公開されました。



【資料 1】武蔵野文化協会〔冊子〕 昭和 23（1948）年頃

「武蔵野文化協会設立趣意書」と「武蔵野文化協会会則」が収められた小冊子。○印の辺り（現在の東京都西武公園緑地事務所付近）に武蔵野博物館と「祖先の村」がありました。

<sup>1</sup> 大正 7（1918）年から昭和 15（1940）年まで東京帝室博物館雇員及び監査員を務めます。昭和 21（1946）年に甲野らとともに秋田県の大湯環状列石の調査を行い、昭和 23（1948）年に明治大学教授となっています。

<sup>2</sup> 現在は東京国立博物館が所蔵。

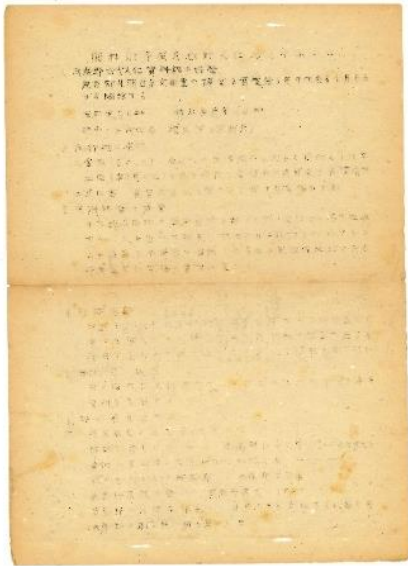
<sup>3</sup> 和島誠一「甲野さんを懐う」『甲野勇先生の歩み』甲野勇先生の歩み刊行会 1968 90 頁



#### 【資料2】武蔵野博物館建設趣意書

昭和23(1948)年頃

子供が「自分の目で見、自分の手で持ち、之を理解」することのできる機会を設けるため、「各地方地方に郷土博物館をつくり、それを各学校で利用するということが、最も適当なこと」としています。また、展示に関しては、郷土に関する幅広い遺物の収集、具体的でわかりやすい陳列、「林の中に石器時代人の住家を復原するとか、内部の構造がわかるように古墳を築くという試み」等を理想として語っています。



#### 【資料3】昭和23年度武蔵野文化協会事業計画(「昭和23年度事業計画経費予算書」より)

昭和23(1948)年頃

擦れによる紙の劣化のために判読できない文字もありますが、この事業計画書には、展示室の規模(陳列室40坪、特別展示室12坪)や、特別展の開催計画(「E.S.Morseの記念展」や「秋のむさしの野草展」、「武蔵野民芸展」等)の記述が認められます。また、「協会の目的である武蔵野郷土文化宣揚の費用に充てる」ため、井之頭公園池に「有料釣場」を設けて収益を得る等、運営資金集めの方法についても記載があります。



#### 【資料4】家形埴輪の復元住居〔写真〕

昭和23~29(1948~1954)年頃

群馬県赤堀古墳出土の家形埴輪から推定復元された住居。出入口近くに設置された解説パネルには、元となった家形埴輪の写真が掲げられています。解説文は判読できませんが、昭和24(1949)年4月に武蔵野文化協会から発行された冊子『武蔵野博物館叢書 第一集 武蔵野の考古学-武蔵野博物館を見る者のために-』<sup>4</sup>中の解説「埴輪家と農民住宅」には、「墳墓に葬られている者が、あの世の住宅として造つたのが埴輪家であるとすれば、埴輪家から復元した家は、豪族の住宅の形をあらわしたのと考えてよいだろう。」とあり、この復元住居について書かれたものと思われます。また、武蔵野博物館の売店では、お土産用の家形埴輪が販売されていましたが、これは甲野のアイデアで、破片となって出土した埴輪を砕き、粘土と繋ぎ合わせて作られたものでした<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 後藤守一 著 (甲野勇資料)

<sup>5</sup> 「鼎談『武蔵野郷土館における発掘調査と考古学』」の岡田淳子談による『東京都江戸東京博物館紀要 第5号』 江戸東京博物館2015 151-152頁

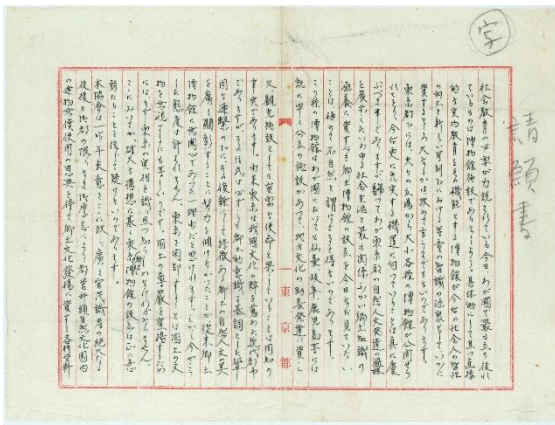




【資料5】縄文時代竪穴住居 [写真]

昭和 23～29 (1948～1954) 年頃

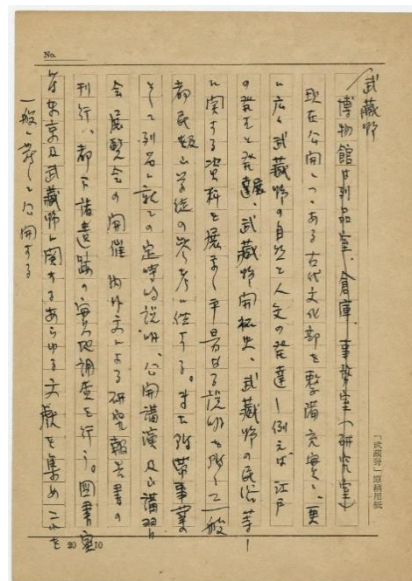
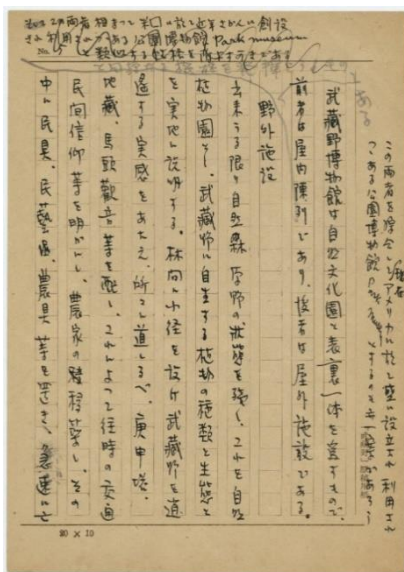
「祖先の村」にあった縄文時代の復元住居。火の燃えている状態を示すため、住居内の炉には赤電球がつけられていました<sup>6</sup>。写真の中央に写る立て看板には、万葉集に収録された安宿王<sup>あすかのおおきみ</sup>の歌が書かれています



【資料6】請願書 (全2枚)

昭和 24 (1949) 年 7 月

武蔵野文化協会理事長 後藤守一から東京都議会議長 石原求明へ宛てた請願書の写し。最低限の施設を維持するだけでも相当の費用がかかるため、協会会員の会費では武蔵野博物館を永続させることができないとし、東京都の直営とすることを願っています。



【資料7】井之頭自然文化園と武蔵野博物館の整備及び拡張について (全7頁。掲載は1頁(右)と6頁(左))

昭和 23～28 (1948～1953) 年頃

武蔵野博物館開館後に作成された甲野直筆のメモ。施設の充実や教育環境の整備のために、「出来る限り自然林原野の状態を残し」た植物園を完備することや、「庚申塔、地藏、馬頭観音を配し、これによつて住時の民間信仰等を明かに」すること、「武蔵野特有のマイマイツ井戸を設け」る等、具体的な構想が示されています。

<sup>6</sup> 吉田格「甲野先生のおもいで」『甲野勇先生の歩み』甲野勇先生の歩み刊行会 1968 81 頁

## 2. 武蔵野郷土館

財政難のため都営計画が引き延ばしになっていた武蔵野博物館ですが、昭和 27（1952）年に東京都議会において都営として完備するよう採択され、翌年 11 月に武蔵野文化協会から東京都へと移管されました。これは、都が立太子記念事業として社会教育施設を伴うレクリエーション施設を造成するために、小金井緑地の整備と敷地内の光華殿<sup>7</sup>への武蔵野郷土館設置を決定したことに関連しており、武蔵野博物館の機能をそのまま武蔵野郷土館へと引き継ぐものとし、武蔵野文化協会の事務所も井之頭自然文化園内から武蔵野郷土館内へと移転しました。

武蔵野郷土館は、昭和 29（1954）年 1 月 14 日に小金井公園とともに一般公開されました。武蔵野博物館の、屋内及び屋外の 2 本立て展示も継承され、野外展示は新たに「古代の村」と名づけられました。開館当時の観覧料は大人 10 円、子供 5 円。小中学生の団体は、事前に手続きをすれば無料で見学することができました。



【資料 8】武蔵野郷土館 [写真]

昭和 29（1954）年頃

左から 2 人目が甲野、4 人目が吉田格（当時 武蔵野郷土館学芸員）。人物の後ろに写っているのが武蔵野郷土館の建物（旧 光華殿）です。



【資料 9】三笠宮崇仁親王に展示解説をする甲野 [写真]

昭和 31（1956）年 3 月 1 日

武蔵野郷土館を訪れた三笠宮崇仁親王（手前）に、展示ケースの前で解説をする甲野（奥）。

【資料 10】弥生式高床倉庫 [写真]

昭和 29（1954）年頃

静岡県の登呂遺跡や山木遺跡で発見された米倉を復元したもの。武蔵野郷土館が公開された当初の野外展示は、弥生式高床倉庫と古墳の石室、敷石住居の 3 棟のみでした。弥生式高床倉庫は、完成した姿が昭和 29（1954）年 1 月 1 日には新聞紙上で公表されています<sup>8</sup>。



<sup>7</sup> 昭和 15（1940）年 11 月の紀元二千六百年記念式典のために宮城（現 皇居）外苑に造立された式殿で、翌年に小金井緑地へと移設されました。現在は江戸東京たても園のビジターセンターとして活用されています。

<sup>8</sup> 朝日新聞 都下版及び武蔵野版 13 面



【資料 11】古墳時代の家 [写真]

昭和 29 (1954) 年頃

「古代の村」の展示は甲野の発案でつくられ、これらの解説もすべて甲野によって書かれました<sup>9</sup>。古墳時代の家の前にも解説らしき立て札が見えますが、残念ながら判読できません。



【資料 12】午砲 [写真]

昭和 29 (1954) 年頃

武蔵野郷土館へ移管された午砲。明治 4 (1871) 年から昭和 4 (1929) 年に廃止されるまで、皇居内旧日本丸跡に設置され、空砲によって正午を知らせていました。

### 3. 国分寺町立文化財保存館

周辺地域の遺跡から多量に見出される古瓦などの遺物を、貴重な郷土資料として長く保管するために<sup>10</sup>、昭和 27 (1952) 年 12 月、武蔵国分寺境内に国分寺町立文化財保存館が開館しました。甲野も文化財保存館に関りを持ったと言われており<sup>11</sup>、甲野勇資料のうちにも関連資料がありますが、具体的にどこまで関与したのかについては、現在のところ明らかではありません。同時期に武蔵国分寺周辺の遺跡調査に携わり<sup>12</sup>、当時の武蔵国分寺の住職 星野亮勝とも交流があったことから、文化財保存館は甲野にとって近い存在であったものと思われます。文化財保存館の建設工事が始まった頃に、甲野が記した「国分寺歴史博物館の設立」<sup>13</sup>には、「二十四坪の小規模なものではあるが、往年の生活をしのぶ遺跡の上に造られる所に大きな意味があろう。遺跡と遺物とが結びあつて始めて生活がはつきり浮び上る。」「こゝに従来の大博物館の反省すべき所があり、小郷土博物館の存在意義がある。」とあり、文化財保存館に寄せる期待が表れています。

<sup>9</sup> 「【座談会記録】企画展「甲野勇の軌跡」公開座談会記録」吉田格の話より『くにたち郷土文化館 研究紀要 第 5 号』2003 66 頁

<sup>10</sup> 石村喜英「《博物館案内》国分寺市文化財保存館」『考古学ジャーナル No.87』ニュー・サイエンス社 1973

<sup>11</sup> 大谷剋「甲野先生と共に」『甲野勇先生の歩み』甲野勇先生の歩み刊行会 1968 106 頁  
梶國男『土の巨人-考古学を拓いた人たち-』(勸たましん地域文化財団 1996 138 頁

<sup>12</sup> 昭和 22 (1947) 年の恋ヶ窪中期住居跡調査、昭和 23 (1948) 年 8 月の武蔵国分寺周辺の竪穴住居跡調査、昭和 24～25 (1949～1950) 年の多喜窪遺跡調査。

<sup>13</sup> 『武蔵野 第 32 巻第 3・4 号』武蔵野文化協会 1952





【資料13】文化財保存館外観 [写真]

昭和27(1952)年頃

昭和27年12月、町の補助を受けた国分寺町観光協会によって、木造平屋建ての文化財保存館が完成しました。平成21(2009)年の武蔵国分寺跡資料館の開館に伴い閉館するまで、郷土の博物館としての役目を担いました。



【資料14】万葉植物園 [写真]

昭和27(1952)年頃

星野亮勝により、武蔵国分寺境内に設けられた万葉植物園。昭和25(1950)年の春、この植物園を造るにあたり、その是非が論じられた席には、星野亮勝と、植物学者の本田正次(東京大学名誉教授)及び大賀一郎(東京大学理学博士)らとともに甲野の姿もありました<sup>14</sup>。



【資料15】文化財保護についての原稿(全7頁。掲載は6頁。)

昭和28(1953)年

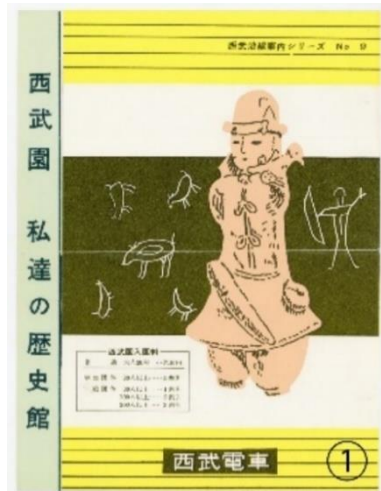
日刊紙へ掲載するために書かれたとみられる原稿。埋蔵文化財の散逸を防ぐための有効な手段として、文化財保存館を例に挙げて説明しています。「寺址周辺の遺物を展示しているが、さしやかな施設にもかかわらず見学者がたえない。しかも町立であるため地元との連りも深く、土器や古瓦などが掘出されると、発見者は進んでここに寄付する。」と、当時の文化財保存館の様子を伝えるとともに、次の通り、甲野の文化財保護についての考え方が明確に示されています。

「文化財は国民全体の共有物で、個人が私する可きものではないという観念が、この小施設の創立によつて住民の間に自然とわきあがつたわけである。文化財の保存は法律や権力に頼るより、こうした心の芽を成長させることによつて達成さる可きものではないだろうか。」

<sup>14</sup> 星野亮勝「万葉植物を求めて」『武蔵野 第231号第232号合併号』武蔵野文化協会1957

#### 4. 私達の歴史館

「私達の歴史館」とは、西武園<sup>15</sup>内にあった展示施設です。甲野は展示指導者としてこの施設に関わっていました。この歴史館が存在していた時期や詳細な場所については現在のところよくわかりませんが、昭和34（1959）年3月から同年5月の西武電車の新聞広告「西武園・ユネスコ村」に、その名前を確認することができます<sup>16</sup>。



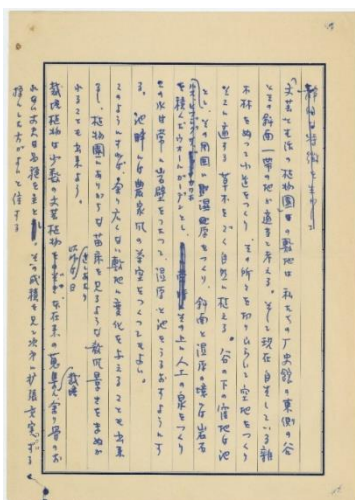
①表紙 ②掲載写真 私達の歴史館外観  
③掲載写真 スペイン洞窟壁画のジオラマ  
④掲載写真 古墳時代の職人集団のジオラマ



【資料16】  
西武沿線案内シリーズ No.9  
西武園 私達の歴史館 [リーフレット]  
昭和34（1959）年頃 西武電車発行



「私達の歴史館」は「人間生活の移り変わりを解りやすく面白く見られる」ことを目指し、「ジオラマの部」と「実物資料陳列」の2部構成になっていました。34基のジオラマで、ネアンデルタール人や氷河時代（旧石器時代）といった人類史の始まりと、縄文時代から江戸の暮らしまで、日本における人々の生活の様子が再現されていました。実物資料の詳細な説明はありませんが、無土器時代（旧石器時代）から縄文、弥生、古墳、奈良、中世の遺物が展示されていたようです。



【資料17】「芸術と生活の植物園」構想メモ（全7頁。掲載は4頁。）  
昭和30年代

「私達の歴史館」の運営方針や事業展開について書かれた甲野の自筆メモ。普段見過ごされがちな植物でも、人間の生活と結び付けて展示することで関心を抱きやすくなると考えた甲野は、文芸作品に登場する植物を収集し、「ちなみのある文の一節と、その場面とを画いた美しいパネルを立て」た植物園を「歴史館の東側の谷とその斜面一帯の地」に設けることを提案しています。

また、生徒を連れて歴史館を訪れた小中学校の教職員から「ジオラマ、パノラマ等に就ては大変わかり易くて興味がある」が「実物資料の乏しいのが何よりの欠点」という意見が寄せられたため、実物展示の拡充を図りたいとも語っています。

<sup>15</sup> 現在の西武園ゆうえんち。東村山文化園として昭和25（1950）年に開館し、翌年に西武園と改称されました。

<sup>16</sup> 読売新聞3月13日夕刊7面、4月17日夕刊5面、5月8日夕刊5面。朝日新聞3月13日夕刊5面。



## 5. 八王子市郷土資料館

八王子市郷土資料館は、地元の収集家 井上郷太郎の個人コレクション（以下「井上コレクション」）の保存と継承のために、中学校高校の教師やPTA等による市民運動がきっかけとなり設立されました。都市化により失われてゆく多摩地域の遺跡保存について、意見が合致した井上と甲野は、昭和 35（1960）年 4 月 2 日に多摩考古学研究会を発足<sup>17</sup>。昭和 37（1962）年に井上が自身のコレクションを八王子市へ寄贈する旨の意思を表明すると、甲野も様々な方面からこれを後押しすることになります。

膨大な井上コレクションの市への移管は、財政上の困難を理由に難航します。井上は一度寄贈を断念しますが、都立八王子工業高等学校教諭の柗國男をはじめとする地元の中学校高校の教師や、井上コレクションの地元での保存・活用を願う市民等によって、昭和 36（1961）年 8 月 17 日、「井上コレクションの市移管を推進する会（仮称）」（後に「郷土資料を保存する会」と改称）が結成され、井上に代わりコレクション寄贈及び博物館設置のための働きかけを行うことになります。この示し合わせの際、甲野は立会人を務めています。その後、井上コレクションの価値を広く一般に知らせるための展覧会の開催や、市議会議員への陳情といった活動が実を結び、八王子市は昭和 38（1963）年 12 月の定例会議でオリンピック記念事業として資料館を建設することを決議します。昭和 39（1964）年 3 月 7 日に、井上コレクションの寄贈式が八王子市役所市長室で行われ、昭和 42（1967）年 4 月 1 日に開館の運びとなりました。



【資料 18】多摩古代文化展 [写真]

昭和 35（1960）年 7 月 5 日～7 日

多摩考古学研究会の発会を記念し、八王子繊維貿易会館で開催された「多摩古代文化展」での記念写真です。前列右から 4 人目が甲野、その隣が井上郷太郎。開催初日には、甲野による説明会が開かれました。

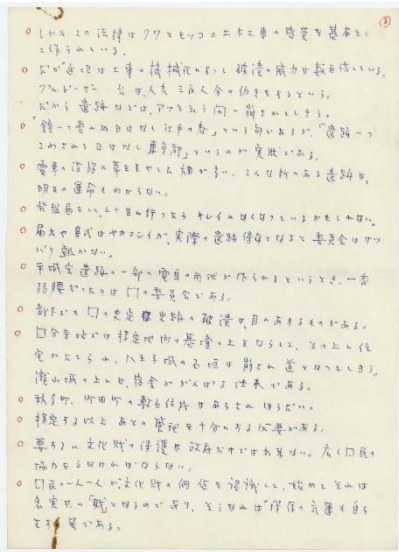


【資料 19】多摩古代文化展 [写真]

昭和 35（1960）年 7 月 6 日

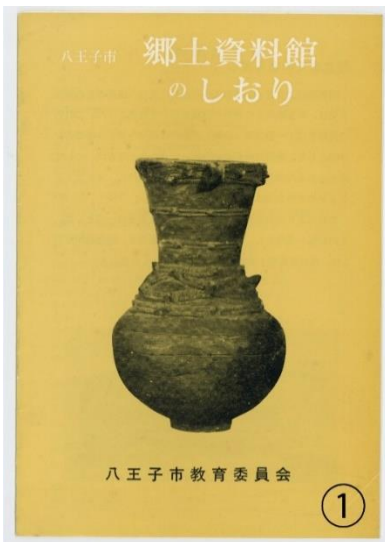
多摩古代文化展の展示室。中央に三笠宮崇仁親王。その右に、井上郷太郎と甲野。この日は、三笠宮崇仁親王を囲んでの座談会も催されました。

<sup>17</sup> 井上郷太郎の弔辞より『甲野勇先生の歩み』甲野勇先生の歩み刊行会 1968 169 頁



【資料 20】埋蔵文化財の保護に関する甲野の自筆メモ（全4頁。掲載は3頁。）  
昭和 38（1963）年頃

文化財保護についての啓発のため、甲野が登壇した講演会用の原稿と思われるメモ。国分寺や八王子城の石垣等を例に挙げ、開発によって遺跡が破壊されている現状を伝え、「国民一人一人が、文化財の価値を認識」することの必要性を訴えています。近く建設が実現しようとしていた八王子市郷土資料館についても、「発見された資料はみなここに保存できれば、理想的であろう。」と記されています。



【資料 21】八王子市郷土資料館のしおり [リーフレット]

昭和 42（1967）年頃  
①表紙 ②掲載写真 資料館外観 ③掲載写真 展示室内

八王子市教育委員会発行のリーフレットで、資料館外観や展示室内の写真が掲載されています。開館記念展「郷土のあゆみ展」の展示指導は甲野が務めており、約3週間という短い期間の中で展示の準備が行われました。甲野も3月31日の夜まで解説の執筆にあたり、すべての作業が終了したのは開館当日の午前1時15分であったようです。

### 余談：理想の博物館を求めて

甲野が如何にして博物館設立の構想を抱くようになったのか、甲野自身が語るものとしては、昭和 21（1946）年発行の『あんとろぼす 創刊号』に掲載された「古代史と博物館」<sup>18</sup>に示されています。また、昭和 30（1955）年に発行された『武蔵野 第 34 巻第 1 号』の「子供たちと博物館」では、子供たちが自ら興味関心を抱き、学ぶための教育施設としての博物館のあり方を模索する甲野の姿を垣間見ることが

<sup>18</sup> 甲野が山岡書店より発行した考古学雑誌。「戦時にあつては国史が国民精神運動の一方便として利用され」、「敗戦の結果、われらは従来教え来られた古代史を失ふこととなつた。」「正しき古代史を編成し小国民〔子ども〕たちに心のよりべを与る」ため、「科学的なる古代史はまづ考古学的事実に立脚しなければなら」ず、「今後の歴史教育に対して博物館の分担する任務たるや、極めて重かつ大と言はねばならない。」と述べています。（甲野勇資料）

できます。ここまでは甲野勇資料を介して甲野の博物館活動を概観してきましたが、最後に甲野が博物館設立に思い至った経緯と目指した博物館像を、甲野の経歴と周辺環境から探ってみたいと思います。

甲野は国立に越して来る前の昭和 16 (1941) 年 4 月から昭和 21 (1946) 年 12 月まで<sup>19</sup>、厚生省研究所人口民族部の嘱託員として、主に東南アジア民族の研究に従事しています。同研究所の研究官であった小山栄三の回想には、「その頃〔甲野が厚生省研究所人口民族部の嘱託員であった頃〕既に甲野君は多摩考古学館や自然博物館設立の構想を持っていたらしく頻々として東京都の山田高級助役〔山田文雄副都知事〕のところへ出入していた」<sup>20</sup>とあり、この時既に、博物館設立についてのある程度明確なビジョンを持っていたものと思われます。

さらに甲野の経歴を遡ると、甲野の周囲には調査・収集した資料を展示する施設があり、「甲野と資料展示」という視点から、それらを取り上げてみることもできそうです。

一つは、昭和 21 (1946) 年 9 月、千葉県市川市国府台に設立された日本考古学研究所の 2 階にあった付属陳列館です<sup>21</sup>。日本考古学研究所の設立に協力した甲野は、同研究所の評議員及び研究員でした。付属陳列館の展示に甲野が直接関わることはなかったようですが、研究所の設立メンバーには、後藤守一や吉田格がおり、後に武蔵野博物館や武蔵野郷土館の運営に携わることとなる顔ぶれが揃っていました。もう一つは、本稿の「はじめに」で少しだけ触れた大山史前学研究所に設けられた展示室です。この展示室は、研究所の発掘調査によって収集された遺物が並べられていました。見学者は比較的自由に、これらの資料を実見することができ、蔵書 1 万冊に及ぶという図書室とともに利用されたようです<sup>22</sup>。

甲野の目指した博物館については、【資料 7】、【資料 17】にある植物園の記述から、展示施設だけでなく周囲の自然環境の整備も、甲野の博物館論において重要な位置を占めていることがわかります。甲野は、侍医として宮内省にも出入りした眼科医の父をもっており、病室や手術室、薬草園が併設された家に住んでいました。薬草園の造り手である大叔父の遠藤信古から植物名を教してもらった幼い甲野は、何気ない草のひとつひとつに名前がついていることに驚きを感じたと述懐しています<sup>23</sup>。こういった幼少期の体験も手伝い、身近な歴史や自然環境を保存し、体験的に学べる場を提供しようとしていたと思われる。

また、特に武蔵野郷土館の野外展示をつくる際に、甲野が手本としたのが、現在もスウェーデンのスト

---

<sup>19</sup> 甲野による履歴書の下書き（甲野勇資料）より年代を示しましたが、後述する小山の回想とも食い違いがあり、甲野が厚生省に勤め始めた時期は、これより遅かった可能性があります。詳細はわかりませんが、昭和 18 (1943) 年 4 月に厚生省研究所人口民族部より刊行された『南方民族図譜』の解説を甲野が担当しているため、遅くともこの頃までに嘱託員となったと思われます。

<sup>20</sup> 小山栄三「甲野君を悼む」『甲野勇先生のあゆみ』甲野勇先生の歩み刊行会 1968 71 頁

<sup>21</sup> 領塚正浩「ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所～失われた考古学史を求めて～」『鎌ヶ谷市史研究 第 9 号』鎌ヶ谷市教育委員会 1996

<sup>22</sup> 阿部芳郎『失われた史前学』岩波書店 2004 14-17 頁

<sup>23</sup> 甲野直筆の遺稿「石器時代との対話」（甲野勇資料）より



ックホルムにあるスカンセンという野外博物館でした<sup>24</sup>。スカンセンは、アルトゥール・ハゼリウスによって、明治24(1891)年に開館した世界初の野外博物館で、重工業化や農業の機械化、都市部への人口流入による過疎化によって失われてゆく農村地域の生活を保存することを目的として設立されました。スウェーデン各地の歴史的、文化的建造物が移築された園内には、民族衣装を身に着けた係員も配されました。武蔵野郷土館の開館当日に発行された新聞では、館の関係者が「日本では特異な内外博物館の二本建て計画を進め、ストックホルム郊外のスカンセン博物館に匹敵するような大公園を作ろう」<sup>25</sup>と張り切る様子が報道されており、スカンセンを目標とすることは武蔵野郷土館関係者間での共通の認識であったようです。



【資料21】民俗博物館はなぜ必要か [冊子]

昭和29(1954)年9月

日本民族学協会/日本人類学会/日本常民文化研究所発行

表紙にはスカンセンの園内マップが掲載されています。広大な敷地を有する園内には、スウェーデン各地から移築された建造物が立ち並び、園の東側には動物小屋が配置されているのがわかります。

おわりに

甲野が最初に携わった武蔵野博物館から、亡くなる直前に開館した八王子市郷土資料館に至るまで、「文化財は私するべきではない」というのが甲野の信念でした。文化財を公共の遺産として守り後世に伝えてゆくためには人々に文化財保護の意識を芽生えさせることが重要と考えた甲野が、その一手段として作り上げたのが博物館であったと言えます。甲野の仕事は多岐にわたり、甲野勇資料にも実に多くの考古、歴史、民俗、民族に関する写真や講義メモ、実測図などが残されています。また、国立における甲野の活動も幅広く、文教地区指定運動、公民館活動、南養寺遺跡や関鋳物址の発掘調査など、国立の歴史を語る上で欠かせない様々な場面に登場しています。

今回紹介したのはそのうちの僅か一部ですが、資料整理作業と並行し、逐次公開していきたいと考えています。本稿をご覧いただき、お気づきの点がありましたら情報提供いただければ幸いです。

(中根聖可)

<sup>24</sup> 『座談会記録』企画展「甲野勇の軌跡」公開座談会記録」吉田格の話より『くにたち郷土文化館研究紀要 第5号』2003 66頁

<sup>25</sup> 朝日新聞武蔵野版 昭和29(1954)年1月14日 8面「小金井公園きょう一部公開 武蔵野郷土館と野外博物館」

## 凡例

- ・本稿に掲載した画像は全て甲野勇資料です。
- ・引用箇所や資料名の旧字体は新字体に改めています。旧仮名遣いはそのまま用いました。
- ・□内は筆者による注釈です。
- ・人物の敬称は省略しています。

## 参考文献（本文及び脚注に示したものを除く）

- ・青木豊/矢島國雄 編『博物館人物史 上』雄山閣 2010
- ・落合知子『改正増補 野外博物館の研究』雄山閣 2014
- ・北村信正 他『小金井公園』(財)東京都公園協会 1981
- ・くにたち郷土文化館『甲野勇の軌跡』くにたち郷土文化館 1998
- ・梶国男『郷土シリーズ第五集 緑がなくなるとき-ひとつの文化財保護運動の記録-』東京都立八王子図書館 1970
- ・国分寺市史編さん委員会『国分寺市史』下巻 国分寺市 1991
- ・坂詰秀一「『武蔵野』と考古学」『下布田遺跡 武蔵野の歴史と考古学』江戸東京たてもの園 2015
- ・坂野徹「考古学者・甲野勇の太平洋戦争-『編年学派』と日本人種論-」『国際常民文化研究叢書 4』神奈川大学国際常民文化研究機構 2013
- ・塩野半十郎『多摩を掘る』武蔵書房 1970
- ・清水周「甲野勇の博物館活動-武蔵野博物館を中心に-」『くにたち郷土文化館研究紀要 第2号』くにたち郷土文化館 2000
- ・武井則道「甲野勇論」『縄文文化の研究 10 縄文時代研究史』雄山閣 1984